

臍窩ヨリ排泄セラレタル蛔蟲ノ一例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30703

ク定型のニシテ、熱モ弛張性ニシテ局部ノ發疹モ漸時咬傷部ニ近キ部ヨリ發シ、其大キサモ小ハ指頭大ヨリ手掌大ニ至リ可ナリ浸潤ヲ有シテ壓痛アリ、一見水泡狀ヲ呈シ紫紅色ナリ、腺ハ腫脹著明ナラザルモ指壓ニ對シ鋭敏ナリ、全身症狀ハ全身倦怠、食思不振、頭痛アリ、精神沈鬱シ身體各所ノ疼痛過敏症ヲ有シ惡心アリ。

經過。 小生ノ例ハ「イマミコール」注射ヲ行ヒシ爲メ、眞正ナル經過ヲ見ルヲ得ザリシハ遺憾トス。則最初局部ノ瘳法ノミニ止メタリシモ、諸症増惡ノ傾向甚シキヲ以テ翌日「イマミコール」注射ヲナシ、隔日三回ニテ諸症全部消散今日至ルモ何等發作異變ヲ認メズ。

然ルニ當時(十月十日)經度ノ顔面浮腫蛋白尿ヲ有シ、腎臟炎ヲ併發セルハ石原博士ガ動物實驗ニ於テ既ニ腎臟炎ヲ證明シ、又腎臟ノ組織的検査上、皮質ノ毛細管ハ甚シク擴張充血シ所々ニ小溢血點アリ。迂曲細尿管及糸毬體ニハ往々細胞ノ輪廓不明トナリ、硝子樣變性ヲ呈シ急性腎臟炎ノ像アリト。サレバ腎臟ノ變化ハ人獸共ニ重キヲ置クベク、クローン氏ノ五十二例ノ病例中尿検査ヲナセシ記載アルモノト、又検査不明ノモノトアルヲ以テ百分比例ハ不明ナルモ、其中九例ハ確實ニ臨牀上腎臟炎ヲ認メタリト。サレバ予ノ一例モ又此腎臟變化ヲ起セシモノトス。殊ニ本症ノ治療ニ就テハ其病原今ヤ「スピロヘータ」ナルコト明カトナリ。且ツ谷口博士ハ本病ニ「サルヅルサン」ノ卓効アルヲ力說セシ以來一般ニ試ミラル、ニ至リ最近、伊東、松崎氏等ハ「イマミコール」注射ノ効果アルヲ報告セラレ、予モ又本例ニ「イマミコール」注射ヲ施シ、意外ノ効果ヲ得タルコトヲ信ズ。本注射ハ「サルヅルサン」等ニ見ル新鮮餛水ノ作製、注射操作ノ繁雜ナク、至極簡單ニ行ヘ得ルヲ以テ本病治療ニハ先ヅ試ムベキモノトス。

臍窩ヨリ排泄セラレタル蛔蟲ノ一例

金澤醫學士 團 野 輝 雄

蛔蟲ハ人體寄生蟲類中、最モ屢々遭遇スル處ノモノニシテ、特ニ本邦ニ於テハ其症例ノ多數ナル遙ニ歐洲諸國ノ上

ニアリ、從テ之レガ異常逸出ヲ招來セル症例モ亦意外ニ多數ナル可キハ諸家ノ報告ヲ徵スルモ明カナル可シ。

既往ノ報告ニ於テハ蛔蟲ノ常住地タル小腸ト解剖的ノ連通ヲ有スル管腔内ニ證明サレタルモノ場所トシテハ、前頭竇内、上顎竇内、鼻淚管内、外聽道、肝臓内、輸尿管内等ニシテ消化管ト何等連通ナキ個所ヨリ證明サレタルモノトシテハ、脊柱管内、左胸腔、子宮腔、膀胱又ハ腹腔内等ニシテ特ニ所謂蛔蟲膿瘍ヲ腹壁殊ニ臍部又ハ鼠蹊部ニ作リタルモノハ邦國ノ報告甚ダシク稀ナリトセズ。

而シテ予ノ實驗例ハ臍下腹壁ニ於テ蛔蟲膿瘍ヲ作り臍窩部ニ自潰シ、蛔蟲ハ自潰孔ヲ經テ自然的ニ蛔蟲體ノ一部ヲ現出セルモノニシテ、既往ノ文獻ニ徵スレバ敢テ奇例トスルニ足ラザルモ、蛔蟲ノ異常逸出ノ文獻ニ一例ヲ追加セントスルモノナリ。

症 例

患 者 福井縣者狹國、吉岡某女、年齡十六歲。

遺傳的關係 父ハ胃癌症ニテ死亡セシノ他特記ス可キモノ無シ。

既往病歴 體格薄弱ニシテ未ダ月華ヲ見ズト云フ患者ハ大正七年四月京都ニ於テ奉公中左側肋膜炎ニ罹リ京都ニ於テ醫師ノ治療ヲ受ケシ事約四、五十日ナリシモ次テ腹部膨滿ヲ來タシ腹部一般不快自發痛及ビ壓痛アリ時トシテ下痢ヲ發シ食慾不進身體ハ漸次羸瘦ス仍リテ郷里ニ歸養シ暫日某醫師ノ加療ヲ受ケタリシト云フ。

某醫師ノ經過錄ニ依ルニ大正七年六月十五日初診體格薄弱營養不良脈數九十七ニ至ル體溫三十八度ニシテ左胸部ハ第四肋骨以下濁音ヲ呈シ腹部ハ一般ニ肥大シテ濁音ヲ呈シ緊滿波動ヲ觸レ濁音變換ハ著明ナラズ約一個月間服藥セシガ後患者ハ休養シタリシト述ブ。

現病歴現症及ビ經過 大正九年五月十八日右患者突然來院ス所述ニ依

レバ既往ノ胸腹部症ハ大正七年秋以來稍良好トナリシガ凡ソ四十日前臍窩ヨリ約六七仙迷ノ右下方ニ於テ掌大ノ部分知覺過敏ヲ自覺シ後自發痛アリ漸次腫脹シ按撫或ハ步行等ニ疼痛増劇シ途ニ徑十仙迷ノ部ニ稍々少ナル圓形ノ腫物トナル之レニ次テ臍ノ上部五仙迷ノ部ニ稍々少ナル圓形ノ腫物ヲ發生セリ。

然ルニ二十日前ニ至リ臍窩ヨリ膿汁樣ノモノヲ漏ス事五六日間ニシテ停止ス二三日後就眠中ニ臍窩ヨリ白紐樣ノモノ二寸斗リ出テ居リタルヲ患者自ラ發見シ硬膏樣ノモノヲ貼シテ來院セリ仍リテ之ヲ摘出シテ檢セルニ十二仙迷ノ蛔蟲ノ雌虫ニシテ既ニ死シ居リシモ外觀上稍新鮮ノ觀ヲ呈セリ。

排泄液ニ付テ虫卵ノ有無ヲ鏡檢セント壓出セシニ一滴ノ液ヲモ得ザリシハ遺憾ナリキ仍リテ「サントニーネ」ヲ投ゼシニ蛔蟲數條ヲ下セリ局所ノ處置トシテハ單軟膏ヲ貼用ス其後數日ニシテ蛔蟲排出口ハ正常ニ復セシモ腹

部ニ多少ノ抵抗部ヲ貽シテ假治スルニ至レリ。

猶右患者ハ爾來食氣稍良好トナリ營養モ漸次恢復セリ然レドモ目下尙左

側下三分ノ一輕濁音呼吸音減耗且ツ脊柱左灣チ有ス。

余ノ症例大約前記ノ如シ、然ラバ本例ニ於テ蛔蟲ハ如何ニシテ腹壁ヲ穿通シテ排泄セラレタルヤニ至リテハ剖檢ニヨラザレバ元ヨリ明カナラズ、而シテ蛔蟲ハ生理的並ニ病的開口部ヲ通ジテ諸多ノ場所ニ迷入シ易キハ既ニ明カナルコトナリ、而シテ蛔蟲ハ尙生理的腸管ヲモ穿通シ得ベシトナス者アルモ疑ハシク、殊ニ藤繩學士（臨牀醫學大正六年十二月及ビ大正七年度一月）ハ京大病理學教室ニ於テ實驗例ヲ蒐集シ、蛔蟲ノ腹管ヲ脫出セシ處ハ悉ク潰瘍又ハ穿孔部ニ外ナラザルコトヲ記載セラレタリ。

余ノ列ニ於テ蛔蟲脫出ノ機轉ヲ明言シ能ハザルハ勿論ナルモ、恐ラクハ以前經過セル腹膜炎ノ爲メニ腸管腹膜及ビ腹壁ハ癒着ヲナシ、加フルニ病的機轉ハ漸次腸管ニ波及シテ腸管壁自己ニ何等カノ病理的變化ヲ起シ、蛔蟲ハ此病的薄弱部ヲ穿通シテ腹壁ニ膿瘍ヲ造リ、遂ニ膿瘍ノ自開ニヨリテ蛔蟲ハ自然ニ臍窩ヨリ排泄セラレタルモノナルガ如シ。